

女郎花物語の諸本について

—天理図書館所蔵写本と万治四年板行本—

森 山 茂

はじめに

萬治四年板行の三冊本女郎花物語の下巻々末に付せられてゐる、「藤原氏女」という人物の筆になる跋文に

此ころある人のもとより。かり出にける。をみなへしといふ草紙は源氏さごるもなとやうに。名たかき物とはきこえねど。ふるき女のうた。さならぬことのはをまかきつらねつゝ。ひとへに我どちのめのわらはに。いましめをたれきこえつる。いつれの御とき。いかなる人のつくり給へるといふこともしり侍らねど。ただ其ことはりのあはれにめつらかにおほしければ。例のうつしとゞめんとし侍るに。其本あやしき手してかきにたれば。たゞうちどりのあとゝのみみえて。漬のまさごよみしるべくもあらぬ所々。なけば過て侍るに。こと本をももとめましかは。よくかうがへあらためてもありなましを。又たぐひをもち。さしあたりではえうまじかりければ。よしともかくもあれ。此さうしのおもむきにだにたがはずば。さばかりのところがあべきにもあらずと。はかなき女のひとへごゝるにかいおもひとりて。かの見あつめをきつる物の中より。猶めとどむべかり

けることどもを。秋野のむしとえらびとりて。木々のおち葉とかきまじへ侍し。もろこしの列女傳も。のちのひとかきそへつ。此くにのいせものがたりも。伊勢の御の筆くはへつる其たぐひもあまた侍るにや。(下四十丁オモテ一丁オモテ) という文章が見える。つまり、萬治四年板行本の筆者は、その当世に伝わっていた「をみなへし」という草紙を半分以上にわたって削除し、新しくそれに変わる説話を増補したというのである。そして、このことばを裏書きするかのようになり、現存する女郎花物語には、その写本系と板本系との間に著しい内容の相異がある。

本稿においては、天理図書館に所蔵されている三種の写本と萬治四年板行本との比較を通して、写本系女郎花物語と板行本系女郎花物語との内容の異同を明らかにするとともに、女郎花物語の形態の変遷という問題についての私見をのべてみたい。

まず、左に、天理図書館所蔵の松平家旧蔵本を基とする、同館所蔵の桃岡文庫旧蔵本・同じく綿屋文庫本の二種の写本及び広島大学国文研究室所蔵の萬治四年板行三冊本の内容の異同表をあげておく。(表1—表中の数字及びアルファベット記号は、説話が物語中にあらわれてくる順位を示すものである。)

(表一) 女郎花物語諸本異同表覽

松平家旧蔵本

説話桃
番号文庫本
文庫本
文庫本
年板治四

新左衛門の和歌の事	①	1	1	序
下野の和歌の事	①	1	1	序
「勅なれば」の和歌の事	②	2	2	
源三位頼政、小侍従和歌の事	③	3	3	
小侍従母「なむやくし」の和歌の事	④	4	4	
康資王母の和歌の事	⑤	5	5	
雅通、盛少将和歌の事	⑥	6	6	
(付)家持教訓の事	⑦	7	7	
小少将、紫式部和歌の事	⑧	8	8	
小弁の和歌の事	⑨	9	9	
心得あしき女房の事	⑩	10	10	
「卯花は」の和歌の事	⑪	11	11	
「ひもろきは」の和歌の事	⑫	12	12	
驪姫の事	⑬	13	13	
殿上人、選子内親王和歌の事	⑭	14	14	
源氏物語、女三宮の事	⑮	15	15	
赤染衛門「あともなく」の和歌の事	⑯	16	16	
選子内親王、同家宰相和歌の事	⑰	17	17	
俊成女の和歌の事	⑱	18	18	
宮内卿の和歌の事	⑲	19	19	
俊恵法師、兩人の歌批評の事	⑳	20	20	
ふし柴の加賀の事	㉑	21	21	
能因法師の和歌の事	㉒	22	22	
「われもしか」の和歌の事	㉓	23	23	
「いにしへの」の和歌の事	㉔	24	24	
「我ために」の和歌の事	㉕	25	25	

源氏物語、葵上の事	①	1	1	序
「あかつきの」の和歌の事	②	2	2	
卓文君の事	③	3	3	
輔親物言ひける女の和歌の事	④	4	4	
定家卿「さればこそ」の和歌の事	⑤	5	5	
役憂婆娑の事	⑥	6	6	
赤染衛門「かりにそと」の和歌の事	⑦	7	7	
「ひとりのみ」の和歌の事	⑧	8	8	
源氏物語、鬘黒大將北の方の事	⑨	9	9	
西行法師「しはのとの」の和歌の事	⑩	10	10	
比翼連理の事	⑪	11	11	
周防内侍、忠家和歌の事	⑫	12	12	
中院右大臣和歌の事	⑬	13	13	
「つねよりも」の和歌の事	⑭	14	14	
源信僧都四十一條の起請文の事	⑮	15	15	
寂然「深き夜の」の和歌の事	⑯	16	16	
「真如珠上塵」の詩の事	⑰	17	17	
行成卿堪忍の事	⑱	18	18	
西行法師堪忍の事	⑲	19	19	
呂尚父の妻の事	⑳	20	20	
赤染衛門「あすならは」の和歌の事	㉑	21	21	
隆方の和歌の事	㉒	22	22	
小弁、小式部和歌の事	㉓	23	23	
衣通姫の和歌の事	㉔	24	24	
海雲比丘、童へ教訓の事	㉕	25	25	
神主因基「うすすみに」の和歌の事	㉖	26	26	
「君をゝきて」の和歌の事	㉗	27	27	
陸奥の男女の事	㉘	28	28	
空也上人「たひも」の和歌の事	㉙	29	29	
「今ごと」の和歌の事	㉚	30	30	
桜井の尼「軒端打つ」の和歌の事	㉛	31	31	

一、松平家旧蔵本と桃園文庫旧蔵本

松平家旧蔵本と桃園文庫本との内容の異なる点をまとめてみると、大略、次のようである。

(1) 松平家旧蔵本にのみ見られる説話としては、輔親物言ひける女の和歌の事(16)、赤染衛門「あすならば」の和歌の事(23)、海雲比丘童へ教訓の事(28B)、神主国基「うすゝみに」の和歌の事(29C)、赤染衛門「まことにや」の和歌の事(30)、定家「いくよまで」の和歌の事(31B)、「いのりきて」の和歌の事(31C)、和泉式部「もろともに」の和歌の事(32A)、和泉式部「あさましや」の和歌の事(32B)の九項目がある。これらを出典の立場から検討してみると、後拾遺集から四項目(16・29・30C・31)金葉集から二項目(28A・B)、宇治拾遺物語から一項目(28B)、新古今集から一項目(31B)、新統古今集から一項目(31D)となるようである。このうち、宇治拾遺物語とほとんど同意同文である説話は、本文では「知頭集にはく」としているが、この説話は統群書類従所収の伊勢物語知頭集にはみられない。しかし、女郎花物語には、別に「知頭集にはく」として家持教訓の事(6)——これもまた統群書類従本にはみあたらない——が載せられているし、知頭集が典拠となったと思われる伊勢や日向の物語の事(17)も載せられているから、あるいは別種の知頭集にこれらの説話が載せられていたのかもしれない。たゞ現在のところ、それについての確証を持たないので、一応、きわめて近い説話を有する宇治拾遺物語を典拠としたものとみておきたい。また、新古今集に載せるものについては、女郎花物語は「定家」の作としているが、これは「摂政太政大臣」

の作である。そのつぎに新古今集では定家の歌が載せられているのを思い誤ったものであるうと思われる。

(2) 桃園文庫本にのみ見ることのできる説話としては、朱買臣の妻の事(21F)、摩耶夫人の事(27C)、しゆをうてんき夫人の事(27D)、ひさもんでんわうあねの事(27E)、聖徳太子母の事(27F)、「沖つ鳩」の和歌の事(30D)、念仏和歌の事の一部(34B)の七項目がある。これらの出典は、十訓抄からと思われるもの一項目(21F)、拾遺集からと思われるもの一項目(30D)以外は不明である。ただ(27)に属する四項目の説話は、今昔物語にその説話の原型らしきものがみうけられる。

(3) 松平家旧蔵本と桃園文庫旧蔵本との間の説話の配列順序の相違としては、

(1) 松平家旧蔵本では上巻の終わりに近い方にある説話である、「君をゝきて」の和歌の事(26A)、陸奥の男女の事(26B)、空也上人「たひも」の和歌の事(26C)が、桃園文庫旧蔵本では下巻の初めの方(34)の位置にあり、それに代わって、松平家旧蔵本では下巻の初めの方にある、「さむしろに」の和歌の事(26A)、宇治の橋姫の事(26B)、橋姫物語の事(26C)が、桃園文庫旧蔵本では上巻の終わりの方(26)の位置にある。

(2) 松平家旧蔵本の下巻の初めの部分、説話番号⑨から⑳までの説話の順序が、桃園文庫旧蔵本では㉑が上巻の巻末の部分(26)にあるほか、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘の順序で載せられている。

(3) 松平家旧蔵本の下巻の終わりの部分、説話番号㉙から㉛までの説話の順序が、桃園文庫旧蔵本では㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、

②、③、④の順序で載せられている。

という点を指摘できる。つまり、上巻末、下巻初、下巻末の部分に限って、説話配列の順序に相異があるということである。

(4) 松平家旧蔵本と桃園文庫旧蔵本の表記のしかたを比較してみると、前者が仮名の多い文章であるのに対して、後者では漢字の多い文章となっている。

松平家旧蔵本と桃園文庫旧蔵本との間の相異はほとんど右の四点だけであり、その他の点においては、文章に多少の出入りはあるが、まず同意同文、同順序とみてさしつかえない。

ところで、右の(1)・(2)の点を比較してみると、概して、(1)の説話が独立性のつよいものであるのに対して、(2)の説話はそれぞれ一つのまとまった説話群の一部をなすものであるといえる。(1)の説話は、独自に一つの段落を構成しているもの(⑩、⑫、⑭)、一つの説話をしめくくったのちにつけ加えられた体裁になっているもの(③B・C、⑤B・C)、一つの説話の冒頭に位置し、明らかに一つのまとまりをなしていると思われるうえに、その典拠の面と同じ説話群の他の説話と異質の感じを受けるもの(⑧A・B)であるが、(2)の説話は、一つの説話群の中間に位置するもの(21F・30D・34B)、一つの説話の説明文中に位置するもの(37C、D、E、F)となっている。これは、(4)などを参照してみると、(1)の説話が増補されたものであり、(2)の説話が脱落したものであるという可能性が強いように思われる。従って、桃園文庫旧蔵本の方が女郎花物語の原形態を伝えるものであり、松平家旧蔵本の方は増補された形態を示しているように思われるのであるが、これはまだ推定の域を出ないので、ここではさういう可能性がつよいとするにとどめる。

二、桃園文庫旧蔵本と綿屋文庫本

綿屋文庫本は、「女哥物語」〔仮外題〕という題簽を有しているが、桃園文庫旧蔵本の下巻と説話の配列順序も説話の内容も同じものである。ただ、

(1) 桃園文庫旧蔵本と比べて、仮名の多い文章となっている。

(2) 桃園文庫旧蔵本と比べて、文章の脱落が多い。

という二点の相違を認めうるのみである。従って、綿屋文庫本は、桃園文庫旧蔵本と同一の系統に属する写本で、その上巻を欠いたものといえる。

三、万治四年板本と刊年不明六冊本

女郎花物語の板行本としては、万治四年板行の他に、刊年不明の六冊の本がある。今、その一本である岩瀬文庫所蔵六冊本と万治四年板本とを比較してみると、次のような違いがある。

(1) 題簽は、万治四年板本が単に「をみなへし上(中・下)」となっているのに対して、六冊本では「和番女郎花物語一(二一六)」となっている。

(2) 署名は、万治四年板本が、下巻々末に付せられた跋文の末尾に「藤原氏女」としてのされているのに対して、六冊本では第一冊のはじめに付けられた序文の末尾に「藤原大貳書」としてのされている。

(3) 刊記は万治四年板本では「万治四年辛丑初春吉日 中野小左衛門板行」となっているのに対して、六冊本では、「書林 大坂

秋田屋安兵衛求」となっている
板田屋平兵衛版」

しかし、その他の点については、すなわち文字の原形、一丁の行数、仮名のふりかたなどの諸点については、すべて両板本とも同様であり、万治四年板本の上・中・下それぞれ巻を二冊ずつに分冊して六冊にした体裁であるといえる。

右のごとく、現在、私の目にした範囲内では、写本系はほとんど同意同文で、若干の説話の出入りがある程度の違いであり、板本系は体裁の違いだけで、あとは全く同文であるとみてよいように思われる。そこで、次に板本系と写本系との違いについて、桃園文庫旧蔵本と万治四年板本によって検討してみることとする。

四、桃園文庫旧蔵本と万治四年板本

桃園文庫旧蔵本と万治四年板本とを比較してみると、大略、次のような異同を認めうる。

(1) 桃園文庫旧蔵本と万治四年板本とに共通する説話は50項目、桃園文庫旧蔵本独自の説話は65項目、万治四年板本独自の説話は66項目である。そして、この共通する説話の分布をみると、桃園文庫旧蔵本の場合には上巻に37項目、下巻に13項目、万治四年板本の場合には上巻に17項目、中巻に27項目、下巻に6項目となっている。すなわち、桃園文庫旧蔵本の(1)~(7)と(19)~(25)の説話が、万治四年板本の上巻に(9)~(18)と(26)~(30)の説話が、同じく中巻に、(33)以下の説話が、同じく下巻にとり入れられた形となっており、これを万治四年板本の側からみると、共通する説話は上巻半ばの説話番号(12)から中巻末の説話

番号(73)までの間に、そのほとんどが収められ、この範囲からはみ出るものとしては、僅かに7項目にすぎない。

(2) 出典となった書物を考察するために、桃園文庫旧蔵本の説話的素材が如何なる先行文学に見られるかを調査してみると、(表2)の如くなる。さらに、それらの先行文学の比較検討を通して、女郎花物語の典拠となった可能性が最も大きいと思われる書物を推定し(注1)、それによって女郎花物語の説話を分類してみると(表3)の如くなる。

(表2) 桃園文庫旧蔵本女郎花物語共通説話

表覽(一)を付したものは、関連説話を載せるものを示す

説話 番号	俊秘抄 奥義抄 色葉和難抄	その他
1 A 後拾遺集		
B 後拾遺集		
2 拾遺集		
3 A 新後撰集		○ 東齊隨筆、西公談抄、大鏡、歌の大意
B 詞花集		○ 平家物語、源平盛衰記、平家物語、源平盛衰記、今鏡、選集抄、袋草子、今鏡(袋草子、八雲御抄和歌童蒙抄)
4 詞花集		○ 古来風体抄
5 後拾遺集		○ 悦目抄
6 新勅撰集		○ 古今六帖、新撰隨齋、悦目抄、三五記、八雲御抄
7 A 新古今集	()	○ 沙石集
B 新古今集	()	○ (夫木和歌抄)
8 A	○	
B	○	

35 A	34 A	33	32	31 A	G	F	E	D	C	B	30 A	29	28	F	E	D	C
B	B			B													
35 A (古今集)	(拾遺集)	古今集	後拾遺集	古今集			新古今集	拾遺集			後拾遺集	後拾遺集	古今集				
○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○				
	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○				
○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○				
○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○				
和歌童蒙抄、 歌林良材 集、袖中抄	西公談抄、 歌林良材集、 袖中抄	良材集、 古今序注、 歌林	隨筆、 古今集注、 歌林	日本書紀、 古事談、 無名	源氏物語	(和歌童蒙抄) (知顯蒙抄)	古今著聞集	古今集序注	統歌林良材集	寶物集	今昔物語、 唐物語	今昔物語、 唐物語	伊勢物語、 大和物語、 古今集序注、 袖中抄	(今昔物語)	(今昔物語)	(今昔物語)	今昔物語、 列女伝

50 A	49	48	47 A	46 A	45 A	44	43	42 C	42 B	41 A	40	39 A	38 A	37	36
C	B		B	B											
萬葉集	新古今集	金葉集	拾遺集	詞花集	新古今集	金葉集		拾遺集	金葉集	後拾遺集	金葉集	新後撰集		(後拾遺集)	
			○					○	○					○	
			○											○	
			○											○	
和歌童蒙抄	和歌童蒙抄、 統歌林良材 集	古今著聞集、 沙石集	今昔物語、 歌林良材集	列女伝	袋草子、 今昔物語、 寶物集、 古今著聞集、 沙石集			八雲御抄		東音隨筆	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	(源氏物語)

55	54	53	52	51
B	A	B	A	E D
新千載集		(新古今集)	風雅集	金葉集
		○		
		○		○ ○
		○		
松井家本和泉式部集	知韻集	袋草子	松井家本和泉式部集	袋草子、宝物集

(表3) 女郎花物語出典一覧

詩經	日本書紀	万葉集	古今集(注釈書)	後撰集	伊勢物語	大和物語	拾遺集	枕草子	源氏物語	狭衣物語	後拾遺集	今昔物語
23 A	28	14 C 31 A	7 19 20 34 67 68 74	6 78 79 80 82 77	1 2 3 4	52	16 18 46 88	15 72 75 76 111104	18 B	36 9 A B 14 C D 39 31 B B C	27 C D E F	25 A

先行書物名
写本、板本に共通する説話
写本にのみ見られる説話
板本にのみ見られる説話

金葉集	詞花集	袋草子	俊秘抄	千載集	奥義抄	和歌色葉	新古今集	新勅撰集	源平盛衰記	無名秘抄	十訓抄	統古今集	建礼門院右京大夫集	新後撰集	徒然草	沙石集	統千載集	新千載集	風雅集	増鏡	太平記	微書記物語	新統古今集	小町草子	醒睡笑	
4 25	21 A	A	17 19 24	7 B 26 8 A C A C 12 D B 14 A 34 C B B A 30 16 B A B	30 C A A E D B B 45 E 37 15 50 47 A A B 24 50 32	11 10 B 3 5 8	7 6	3 B	12 C	3 B	C 13 E A B 14 A 21	3 A 39 A	3 A B	9 A	7 B	52 55	46 E 15 A G B B H 18 48 30 C 53 G 21 B 38 B B D	46 E 15 A G B B H 18 48 30 C 53 G 21 B 38 B B D	87 93	95 114	89 116	81 83 84 85 86 96	9 98	115 17 105	47 53 A A	42 A B 44 49 51

大日本史			
本朝列女伝			
漢列女伝			
北野縁起			
伊勢物語知頭集	5 B		
不明	25 C	C 18 43 D 25 B 30 F 34	54108112 10 94 8 113 59 66 106 107 109 110
計	(50)	(65)	(66)

右の表 2・3 によって示されるように、写本系に多く典拠となつた源氏物語、金葉集、和歌色葉、十訓抄の如き書物の説話が、板本系においては大幅に減少し、それにかわつて、日本書紀、万葉集、古今集（注釈書を含む）、大和物語、枕草子、源平盛衰記、漢列女伝等の説話が多く収録されている。このうち、特に板本系独自の出典となつたと思われる大和物語、枕草子、漢列女伝は、板本系女郎花物語の一つの大きな特色を、特に下巻の特殊性を生み出しているといえる。

(3) 共通する説話の内容の異同についてみると、

(4) 桃園文庫旧蔵本が「小侍従母」の事としてあげている「南無やくし」の和歌の事(3B)を、万治四年板本では「小侍従」の事としてあげている。

(5) 桃園文庫旧蔵本が「盛少将」の事としてあげている説話(5)を、万治四年板本では「さきの少将」の事としてあげている。

(6) 桃園文庫旧蔵本が「小少将」の事としてあげている説話(6)を、万治四年板本では「少将」の事としてあげている。

(7) 桃園文庫旧蔵本が「定家」の事としてあげている「さればこそ」の和歌の事(16A)を、万治四年板本では「為重」の事としてあげている。

という相異を見出しうる。このうち、(1)については既に発表したところであり(注2)、(4)・(6)は単なる文字の脱落と思われるので説明を省略する。

さて、(2)についてであるが、この変遷のしかたも、(1)の場合の変遷のしかたとよく類似している。ただ、この説話の場合、定家の説話でも、為重の説話でもなく、元来は為兼の説話ではなかつたかと思われるのである。紙数もあまり余裕がないので詳しい説明は省略するが、今川了俊和歌所へ不審々々のあげる為兼の説話ではなかつたかと思われる。しかし、女郎花物語万治四年板行本の作者の時代には、徹書記物語の流布、もしくは別の伝播のしかたでもって、既に為重の説話として伝えられるところであつた。それを目にして、もしくは耳にしていた万治四年板行本の筆者が意図的に改変したものと思われるのである。

以上が、桃園文庫旧蔵本と万治四年板本との異同についての、大ざっぱな説明である。

むすび

右は、天理図書館所蔵の三種の写本と万治四年板行本の異同を整理した結果である。女郎花物語には、他にまだ数種の写本の名が知られており、それらに目を通すことなく結論を急ぐのは早計にすぎ

る感がしなくもないが、少なくとも、万治四年板本の跋文に述べられた増補改変の真実性と、その実態は確認できたと思う。そして、女郎花物語の諸本を、板本系と写本系とに二分することができるという推定の一步をも確かめ得たと思う。

終わりに、貴重な書籍の閲覧を許された天理図書館と、その閲覧にあたり、数々の御援助を賜わった、中村忠行先生、大谷篤藏先生、稲賀敬二先生に厚く御礼を申し上げる。

注1、この典拠を定めるための手づきについては、拙稿「女郎

花物語の諸問題―出典致を中心として―」（『国文学』）

第二十七号、昭37・3）を参照されたい。

2、同前掲書を参照されたい。

―宇部短期大学講師―